

田辺聖子著

武玉川・とくとく清水

—古川柳の世界—



岩波新書

791



田辺聖子 著

武玉川・とくとく清水

—古川柳の世界—

岩波新書

791

国文学研究資料館蔵

国文学研究資料館蔵

田辺聖子

1928年 大阪生まれ。

樟蔭女子専門学校国文科卒業。作家。

1963年『感傷旅行』で第五十回芥川賞を受賞。88年『花衣ぬぐやまつわる…』(集英社文庫)で女流文学賞を、93年『ひねくれ一茶』(講談社文庫)で吉川英治文学賞を受賞。94年、菊池寛賞を、95年、紫綬褒章を受ける。98年『道頓堀の雨に別れて以来なり』(中央公論社)で泉鏡花文学賞、読売文学賞を受賞。2000年、文化功労者に顕彰される。

著書一『新源氏物語』(新潮文庫)

『ゆめはるか 吉屋信子』(朝日文庫)

『道頓堀の雨に別れて以来なり』(中公文庫)

『姥ざかり花の旅笠』(集英社)

『田辺聖子長篇全集』(文藝春秋、全18巻)

『田辺聖子珠玉短篇集』(角川書店、全6巻)など多数。

武玉川・とくとく清水

岩波新書(新赤版)791

2002年 6月20日 第1刷発行

著者 たなべせいこ
田辺聖子

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷製本・法令印刷 カバー・半七印刷

© Seiko Tanabe 2002

ISBN 4-00-430791-0

Printed in Japan

JASRAC 出 0206829-201

武玉川・とくとく清水

目次

『誹諧 武玉川』の世界	1
「武玉川研究」のはなし	10
『私の好きな川柳』の珍解釈	18
娘の魅力、年増の風情	27
これぞ江戸っ子	36
市井の人間模様	44
お武家さまとて…	54
動物の情景	63
男と女 その一	72

旅路のこころ	81
男と女 その二	91
狐と狸	100
浮世のこまごま その一	108
浮世のこまごま その二	116
老いにけらしな	129
女にまつわる佳句	137
男の句 その一	151
お年頃が女房になって……	156
男の句 その二	165

日常あれこれ

173

お江戸の女房

190

庶民のドラマ

199

参考資料

209

あとがき

213

挿画Ⅱ『近世風俗志』より

『俳諧 武玉川』の世界

『柳多留』を読みなれた目を、『武玉川』に転ずると、一瞬、梯子をはずされたような、
〈不意をうたれた……〉

という好ましいシヨツクに加え、

〈ぬ？……何だ、これは……〉

というような快い狼狽が走るものだ。虚をつかれたという気がするが、それが新鮮なのは文学的香気を放っているからである。

その点、『柳多留』とは雰囲気やたたずまいが全く違う。（もちろん、この両者には類句も多く、成立事情もやや親縁性を帯び、それが共通した口吻をもたらすけれども、ともかく、どこがどうともいえず、風韻がちがう。）

この差異を的確に解明した註釈はまだ見ない。（私の管見によれば、……というところ。）

たとえば、次の句など、どういえはいだらう。

背くらべ手を和らかにさげてゐる

『武玉川』初篇二丁。以下、篇数・丁数は岩波文庫『誹諧 武玉川』山澤英雄校訂の例により、(一一二)とする。表記は読みやすく改めた。

この句はたいいていの人が、へうーんといひ、へいいなあ……とためいきをつくが、ではどこがいいのか、となると困ってしまう句である。

『柳多留』川柳なら、こんな風に言いつばなしにせず、ちゃんと起承転結があつて一句で完結する。『誹風 柳多留』編者の呉陵軒可有がその序に書いたように、

「二句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ」

とある通り。それは実は『誹諧 武玉川』で編者の慶紀逸が付合の前句を「事繁けれハ、これを略す」とした趣向を可有も踏襲したのであるが、それでも『柳多留』の句はきちつとしたドラム性を有する。

母の名は親仁の腕にしなびて居

(『柳多留』二一二)

南無女房 乳を飲ませに化けてこい (同二二八—31)

首くくり富とみの札などもつてゐる (同五—31)

ほほえましいの、悲痛なユーモアの漂うもの、人生の哀愁など、それぞれ、おさまるところを得た句で、ゆるがない位置に据えられており、これまた小形式ながら文学の一ジャンルと遇されるであろう。

しかしこの、『武玉川』の「背くらべ」の句の面白さはどうだろう。

子供が背くらべで身丈みのたけをはかってもらっている。頭頂をコツンといわせて柱なんかシルシをつけられる。昔の小学唱歌にある、へちまき食べ食べ兄さんが 計ってくれた背の丈たけ……というところだ。このとき子供の関心は頭頂に集中している。両手は不用のものとなり、失念しているのである。その無関心ぶりが「和らかにさげてゐる」と表現される。小さいながら軀幹からだをまっすぐ伸ばし、それでいて、ちよつとでも丈高くみせたくて上眼遣いになっている子供の表情まで浮ぶようだ。

次のも、『武玉川』で、人に愛される句だが、

異見の側を通るぬき足 (二―15)

『武玉川』に多い七七の句だがこの七七調、声調なだらかで私の好きなもの。若者(息子か娘か)が親か親類のおじさんおばさんかに異見をされている。緊張をはらんだ空間、それを妨害してはならじと、側を通らねばならぬ者は自然にぬき足さし足になる。人情の瞬景、人生の一齣、しかしあるいは、こちらへ異見の流れ弾が飛ぶのを用心してのことかもしれぬ。

現代、日本最大の川柳雑誌『番傘』を八十数年前に創刊した川柳作家・岸本水府(すいふ)の句に、

泣いているうしろ通ればあけてくれ

という佳什がある。これは叱られて泣いている若い女であろう。畳の部屋である。可憐なお尻を据えて泣いているが、うしろを通る人を気配で知り、ちよっとお尻(大阪弁ではおいど)をよじつて、わずかの場所でもあけてくれるという、しおらしい気配りである。二百数十年を隔てて、好句の一对。

うそがきらひで顔がさびしい (十二―6)

これもファンの多い句。うそをつくのが好きな人はいないが、うそは渡世のテクとして方便

的に黙認される。それは世に生きている限り、われひと共に暗黙の結托なのであるが、うそがきらいと揚言する人もたまにはオトナにいる。

こういう人は塵界の俗世で生きにくい。しかしそういう生れつきだから仕方ない。自分でも困るが、どうしようもない。孤高へ追いつめられてゆくと、おのずから顔がさびしくなっていく。……

さしたることなきスケッチながら人生の深奥に触れ、しかも飄々たるユーモアがただよう。

『柳多留』にはきびきびと果敢な諷刺や皮肉を言挙げことあげして爆笑を誘う句が多いが、『武玉川』は独り言の世界である。ただそこにあるのは人生のある種の佳きエッセンス、美しい漿液しょうえきである。

以前に私は『古川柳おちほひろい』（初刊、一九七六年）を書いて古川柳の世界へ案内し、次いで現代川柳を俯瞰して『川柳でんでん太鼓』（初刊、一九八五年）を書いた。その延長で一九九八年、『道頓堀の雨に別れて以来なり——川柳作家 岸本水府とその時代』（中央公論社刊）を出した。私は若いころから意味不明ながら古川柳が好きだったが、その流れで岸本水府を知り、彼の生涯と詩業に感動して、いつか書きたいと思っていたのだった。水府は、川柳を蔑視しがちな世間の偏見と戦い、川柳を一文学ジャンルとして定着せしめようと、生涯奮闘した作家であ

る。併せて明治末から昭和四十年代に至る現代川柳の軌跡にも触れた。こうしてふり返ると、私は十年おきに川柳の仕事に手を染めていることになる。

このたびは古川柳の中でも好きな『武玉川』に挑戦したいと思うが、私は研究者でも何でもなく、単なる愛好者なので、プロの研究者からご覧になると、お目だるいこともあるかと恐縮する。ただ、近時、川柳はブームを呼んで（もちろん本格川柳派だった水府からみれば、とんでもない俗流狂句、雑俳のたぐいが川柳という名で横行し、雅俗入れまじって混沌たる柳界を、彼岸からにがしく眺めているであろうけれど）——何より、女流の進出がいちじるしいのが、私などには嬉しく思われる。古川柳ではほとんど女性作家はいなかっただろうから。

女性たちの古川柳への好奇心も強く、その意味からでも『武玉川』への挑戦は、（川柳愛好）の気運を促す一助となろうかと思ったりする。

さて、テキストは先述の、山澤英雄先生校訂の『俳諧 武玉川』（岩波文庫、全四巻）、この四巻ではじめて『武玉川』の全貌が世にあらわれたのである。

寛延三年（一七五〇）十月、江戸は通本町とおりほんの本屋・松葉軒しんようけんから、いままでの俳書より小型の句集が板行された。『俳諧 武玉川』、江戸座俳諧の付句集である。編者は慶紀逸けいきいつ。「江戸の御用鋳物師の家に生まれた生粋の江戸人」と神田忙人ぼうじんさんの『「武玉川」を楽しむ』（朝日選書）にある。

——私の参考書はこの本と、『武玉川選釈』（森銑三著、彌生書房刊）で、『柳多留』の方はさまざまな本が出ているのに、『武玉川』は寥々たるものだ。原典の字が読みにくい上に、難解な句が多いという。

しかし今まで見た通り、ほんの少しあげただけの句だが何とも新鮮で手ごたえのある世界、手さぐりでも『武玉川』を読み噛かじつてみようと思う。

紀逸は若くして俳諧の道に入り、やがて立机りつきする。プロの点者てんじや（選者）となって、連句の指導をする。一座で五七五の長句と七七の短句をよみ続けていくのだが、月・花や恋の句の置場（これを定座という）そのほか、連句には煩瑣はんさなきまり（式目）がある。これも習熟すると、それなりに楽しむことができるのだが。私は『ひねくれ一茶』（講談社文庫）を書いたとき、一茶が門弟と張行ちやうぎやうした連句を読みすすむうち、なるほどこれは、地方の旦那衆がたがへ連句やへ俳諧にはまるはずだと思った。数人の一座が苦吟し推敲すいこうしつつ、句趣は転々と移りかわり、四季を経、人生を歷程し、恋や無常を見わたして、めでたく春の句でおさめて満尾まんびする。その付合の醍醐だいご味、その達成感はいへんな充実感を人々にもたらす。

ところが民衆に俳諧熱が浸透してくると、みなみな、面倒な規約をけむたく思うようになる。連句の練習のために、指導者の宗匠が前句まえくを与え、門弟にそれに付ける句を作らせていたのが、

人々は付句だけに興味を抱くようになった。紀逸は前句付の句が俳諧から離れ、より自由闊達な流れに泳ぎ出したのを知る。彼は俳諧師であると同時に、時代のジャーナリストでもあった。ついに前句を省いて、付句だけで独立できる付句集を出すことになった。それが『武玉川』だが、歌枕の六玉川をひびかせ、武蔵の玉川、という意味を持たせたものらしい。(柄井川柳が『柳多留』を出したのは、その十五年後である。)『武玉川』初篇が出るなり、民衆に喜び迎えられた。十五篇まで刊行して紀逸は歿、二世紀逸が十八篇で完成させる。——皆さまのご教示を仰ぎつつ、『武玉川』を楽しんでみようと思う。

私がおぼつかなく『武玉川』を読みとくさまは、さながら岩間いわまの清水のほそい流れをむすぶような心もとなさである。

とくとくと落つる岩間の苔清水

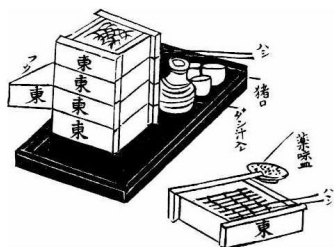
汲みほすほどもなきすまひかな

伝西行のこの歌をかりて、タイトルとした。

研究書ではなく、愛好クラブのお誘いのメッセージと思って頂きたい。七七の句に私の好きな作品も多いが、五七五も好きだ。たとえば、

さまざまな人が通つて日が暮れる
(二―18)

の、「人」を「句」にかえてみれば、千変万化の句のおもむきの幻妖をたのしむだけでも『武玉川』は好ましい。



「武玉川研究」のはなし

さきに私は『武玉川』のテキストとして『誹諧 武玉川』、それに参考書として『「武玉川」を楽しむ』『武玉川選釈』を挙げたが、この他に未完ながら、すぐれた研究のあることを編集部から示唆され、そのコピーを頂いた。というのも、これは川柳の専門雑誌、『川柳雑誌』に戦前、連載されたもので、五篇で中絶したままになり、刊行されていない。（実はこのあとで、清博美氏より『誹諧武玉川初篇輪講』つづけて二篇、三篇まで刊行されていることを、ご教示を受け、知った。『川柳雑俳研究会発行、山田昭夫・清博美編集、清博美発行』となっている。三篇の発行は一九九九年十二月五日。）

私は以前、『道頓堀の雨に別れて以来なり——川柳作家・岸本水府とその時代』を書いたとき、古書店で『川柳雑誌』も数年分入手したことがあるので、いそぎ書棚から、大汗かいて〈川柳資料〉を取り出した。というのも、御用ずみの資料は書庫の奥深くへ納めてしまうので。